

ゾラにおける自転車に乗る女 — 『パリ』 と写真をめぐる一考察¹⁾ —

高 橋 愛

フランス自然主義文学を代表する作家エミール・ゾラ Emile Zola (1840-1902) は、『ルーゴン・マッカール叢書』 *Les Rougon-Macquart* (1871-1893) や晩年におけるドレフェス事件への積極的な参加が知られるが、生涯にわたって視覚イメージへの情熱を持ち続けた人物でもあった。1870年代は、小説の執筆と同時に美術批評家として健筆を揮い、印象派画家たちと文学と絵画の共同戦線を張る。81年のサロン評を最後にその活動には実質的に幕を下ろしたが、88年からはカメラの世界に魅了され、数多くの良質な写真を残した。本稿の目的は、ゾラの私的世界をあらわす写真を検討し、作家が被写体へ向けた視線や画像から浮かび上がる思想を主に自転車に乗る女性の表象を通して考察することである。そして、写真と小説との関係を明らかにしていきたい²⁾。

- 1) 本稿は科学研究費補助金（若手研究B 課題番号24720158）の交付による研究成果の一部である。
- 2) ゾラの写真については、以下を参照する。*Album Zola*, iconographie réunie et commentée par Henri Mitterand et Jean Vidal, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1963 ; Emile Zola, *Œuvres complètes*, édition établie sous la direction d'Henri Mitterand, Paris, Cercle du Livre Précieux, 15 volumes, 1966-1970, tome VII ; *Zola photographe*, 480 documents choisis et présentés par François Emile-Zola et Massin, Denoël, 1979 ; *Emile Zola photographe*, sous la direction de Jean Dieuzaide, Toulouse, Galerie municipale du Château d'eau, 1982 ; *Zola*, sous la direction de Michèle Sacquin, Bibliothèque nationale de France/Fayard, 2002. 本稿における引用はすべて拙訳であるが、次の邦訳と解説を参考にした。エミール・ゾラ『パリ』、竹中のぞみ訳、白水社、2010；エミール・ゾラ『時代を読む1870-1900』、小倉孝誠・菅野賢治編訳、藤原書店、2002。

1. 写真があらわすゾラの思念

ゾラは1888年8月にジャーナリストのヴィクトル・ビヨーから写真の手ほどきを受け、亡くなる1902年まで撮影を続けた。3つの暗室を構え、10台以上のカメラを所有し、およそ7千から1万枚の写真を残したといわれる。それらの画像が私的世界にとどまり、生前発表されることもなかったため、公に主張すべき意味を含み得ない写真の中身については、これまで深く検討されなかった。

しかし、ゾラが撮った写真の数々を子細に見ていくと、幸せな瞬間を機械的に切り取った単純な画像ばかりではなく、作家が強く望んだ場面やその思想を可視化したものも多いことがわかってくる。1902年に撮られた2枚の写真に注目してみよう。ゾラが1888年から恋愛関係になったジャンヌ・ロズロ、ふたりの間に生まれた長女ドゥニーズ、長男ジャックと取まった家族写真である。1枚目の写真〔図版1〕では、『オーロール』紙 *L'Aurore* を手にしたゾラが家族を見守る中、ジャンヌは娘の読み書きを指導している。ジャックは自習に励んでいるようだ。2枚目の写真〔図版2〕へ移ると、今度はゾラがジャックの勉強を見ており、鉤針で編むジャンヌはドゥニーズの前で女性としての模範を示す。これらの画像からは、当時のフランスで広く議論された家族の役割や教育について、ゾラも強く意識していたことが見て取れる。つまり、1898年に「私は告発する！」を発表した『オーロール』紙を子どもたちの前で広げるゾラからは、外の公の世界の体現者として市民の義務を全うしよう志す父親像³⁾が、ジャンヌからは出産、授乳、しつけに加えて、子どもたちの基礎的教育に関わる役割を引き受けた母親像⁴⁾が浮かび上がってくるのである。この時期になると、多くのフランス人の家庭で子どもたちが学業面で良い成績を取めることは一家の重要課題となってい

3) 19世紀フランスにおけるこうした父親像については、以下を参照。Elisabeth Badinter, *L'Amour en plus—Histoire de l'amour maternel, XVII^e-XX^e siècle*, Paris, Flammarion, 2010, pp. 342-343. [邦訳：E・バダンテール『母性という神話』、鈴木晶訳、ちくま学芸文庫、1998.]

4) 当時の社会で議論されたこのような母親像に関しては、主に次を参考にした。Ibid., pp. 305 et 312.

た⁵⁾。ジャンヌに宛てた数々の手紙の中で我が子の学業成績を尋ね、教育熱心な父親であったゾラは、これらの写真を撮影するにあたって、「徳育」(éducation)だけではなく、「知育」(instruction)にも取り組むジャンヌを通して、当時の社会で称揚された「良き母」のイメージを表している。こうした両親の下で子どもたちは勉強熱心な姿を見せる。2枚の写真はシャッターの作動装置を使って撮影されたので、4人は各々の役割を示し合わせ、どのように撮られるべきかを意識し、カメラの前でポーズを取ったと思われる。つまり、ここには不慮の死を遂げる数週間前のゾラが写し出した、最後の「あるべき家庭のイメージ」が記録されているのである。

2. 「人口減少」と自転車に乗る女

このように、写真は撮る者が被写体へ向けた視線だけではなく、その理想や思想も浮かびあがらせるのだが、こうした家族の表象について検討するには、ゾラが1896年に書いた「人口減少」を思い出す必要があるだろう。フランスにおける出生率の低下を懸念するゾラは、この問題と文学との関係を次のように考えていた。

わが国の文学で最近奇妙に流行しているデカダン派、象徴派と名づけられたものへ下りていき、もはや目にするのは、子を産み、それを誇らしく思う健やかで誠実な愛への抵抗ばかりである。性を喪失して竿のように細く、母や乳母となる器官を持たなくなった女性たちであふれている。[...] 人間の糧となる偉大な麦は刈られ、白百合の野が世の中を毒しているのだ⁶⁾。

19世紀後半のフランスでは、1871年の普仏戦争の敗北と家庭における産児制限

5) 工藤庸子『宗教 vs. 国家—フランス<政教分離>と市民の誕生—』、講談社現代新書、2007、p. 149。

6) Emile Zola, « Dépopulation », *Le Figaro*, 23 mai 1896, dans *Œuvres complètes*, tome XIV, p. 788.

の影響で人口が停滞し、人口増加策をめぐる議論が活発に行われていた。政府が1895年に実施した人口調査で死亡数が出生数を上回っている事実が明るみとなり、ジャック・ベルティヨン Jacques Bertillon (1851-1922) の提唱で96年に「フランス人口増加のための国民連合」L'Alliance nationale pour l'accroissement de la population française が設立されると、この国では「家庭における子育て」や「母性」がかつてないほどクローズアップされる。「豊饒」を謳う作家ゾラは、言葉や新聞、書物を通してこうした現状を打破しなくてはならないと考え、「人間の糧となる偉大な麦を刈る」デカダン派や象徴派に批判の矛先を向けたのである。

この記事が書かれた1896年には、同様のテーマがさまざまな場面で扱われていた。12月27日の『ゲルロ』紙 *Le Grelot* を見ると、やはり「人口減少」というタイトルで、子どもを生みながらない女性たちに関する風刺画が載っている〔図版3〕。出産で体形が崩れるのを恐れる細身の貴族女性（左上）、財産の分割を望まない豊満なブルジョワ女性（左下）、口を糊する労働者女性（右下）、出産と子育てに無関心な遊女（右上）と並んで、「もはや女性ではない」と書かれた自転車に乗る女性（中央上）が登場している点に注意したい。フランスでは1880年代に自転車が普及し、90年代に入るとサイクリングブームが到来した。風刺画で描かれた女性が着ている大きな袖のブラウス、細くしぼったウエスト、裾を絞って膨らませたブルーマーという装いは、当時の自転車に乗る女性たちの間で流行し、このような形で多くの女性がズボンを履くようになると、それをジェンダーの侵犯と捉え、男性優位の社会に対する女性の挑戦、男女同権の象徴と見なす向きが強くなったのである。同年12月19日の『リール』紙 *Le Rire* における「最後の婦人騎手」〔図版4〕では、ブーローニュの森に集まった自転車に乗る女性たちが孤軍奮闘するスカート姿の婦人騎手を圧倒している。自転車のハンドルに前屈みになって挑戦的な視線を投げ、両手を腰にあてる威嚇的なポーズを見せる彼女たちは、自転車に乗る女性に対する当時の社会の見方を伝えている。

こうした風刺画がフランスで出回り、「人口減少」を書いた1896年に、ゾラはヴェルスユユで一枚の写真を撮った〔図版5〕。スカート姿のジャンスが自転車

に乗っているのだが、良く見ると、右の足下には台が置かれている。紋切型の「自転車に乗る女」とは異なるイメージを求めて、ゾラが庭で周到に準備をし、ジャンヌが長い間ポーズをして撮影を行ったと思われる。その後もゾラは当時の風刺画とは異なる文脈の女性像を次々とカメラに収めており、98年には、ドレフュス事件の影響で亡命したゾラを追って渡英したジャンヌを再び自転車と撮る〔図版6〕。出国の準備をする恋人に、ゾラは「フランスからブルーマーは持って来ないように⁷⁾」と書き送ったが、それはブローニユの森で自転車を走らせる女性たちと亡命先で観察した若い「ミス (miss) たち」とを比較したうえでの言葉であった⁸⁾。鉄骨ガラス張りの建築を主な物語空間としてきたゾラは、イギリスでも水晶宮にカメラを向けたが、スカート姿で自転車に乗る女性が見せる現代性にも着目してシャッターを切っている〔図版7〕。自転車に乗る男女の風景に関心を持つゾラがフランスで撮った写真〔図版8〕と比較しても、両国における女性の装いの違いなどがわかって興味深い。帰国した99年には、子どもたちとサイクリングを楽しむジャンヌをファインダー越しに捉える〔図版9〕。

このように、ゾラのカメラに収まった自転車に乗る女性たちは、同時期の風刺画で揶揄された大衆的な表象とは異なる姿を提示する。これらの写真と当時の風刺画の間で見られる相違に行き当たるたびに、双方を見る者は「性を喪失して竿のように細い女性たち」を描く芸術を否定したゾラの姿勢を思い起すのである。

3. 『パリ』におけるマリー・クチュリエ

フランス国内で人口減少についての意識が高まり、その問題と関わる「自転車に乗る女」の風刺画が数多く描かれた1896年に、ゾラは『三都市』*Les Trois*

7) Lettre de Zola à Fernand Desmoulin, 6 août 1898, dans Emile Zola, *Correspondance*, sous la direction de B. H. Bakker, Montréal-Paris, Presses de l'Université de Montréal / CNRS Editions, 10 volumes, 1978-1995, tome IX, p. 242.

8) 当時「英国女性は長い襷の入ったスカート姿で、とても優雅に背筋を伸ばして自転車に乗っている」(*ibid.*, pp. 243-244.) と記したゾラは、1900年のアンケートでも「イギリスでは、毎朝スカート姿で自転車を走らせて買い物へ行く若い女性たちにすっかり魅了された」と答えて、その印象を伝えている。Cf. « La Femme dans les sports modernes (Enquête) » in *La Revue*, vol. XXXIV, 1900, p. 23.

Villes (1894-1898) の最終巻にあたる『パリ』 *Paris* (1898) の執筆を開始した。ルルドとローマでカトリック教会の実態を知った若い神父ピエール・フロマンは、政治が腐敗し、無政府主義やテロが横行するパリへ戻ってくる。彼の信仰の揺らぎは強まるばかりだが、科学者の兄ギヨームの家族と交流し、一家に引き取られていたマリー・クチュリエと出会って、日々の労働と愛に支えられた健やかな生活の意味を理解する。主人公が労働と科学を土台とする新しい宗教に可能性を見出し、世俗の世界で生き抜く決意をあらわす場面によって、小説は閉じられる。

絶望するピエールを救い出し、生の世界へと導くマリー・クチュリエの創造にあたっては、ジャンヌ・ロズロの影響が大きいと言われてきた⁹⁾。「背は高くなく、中背で、頑強で立派な体つきをし、大きな腰回りと豊かな胸を持ち、その喉は戦士のように細く引き締まっていた。健康的で筋肉は引き締まり、活力を感じさせながらも、その背筋をぴんと伸ばした歩き方はゆったりとして、女性らしい淑やかさにあふれている。黒い髪で、肌はとても白かった¹⁰⁾」というマリーが象徴するのは「豊饒」であり、「人口減少」の中で批判したデカダン派や象徴派の作品に登場する「性を喪失して竿のように細い」女性像とは対照的である。ゾラが撮った写真を見ても、このように描写されるマリーはジャンヌの身体的な特徴を多く有しているのがわかる〔図版10〕。

ゾラはマリーを形成した環境について、次のように書く。

彼女はとても清純で、健全で、無邪気すぎるほどであり、生まれつき実直だったので純潔を保っていたが、立派な教育を受け、学んだことを知識欲旺盛でしっかりとした頭脳にきちんと蓄えていた。また、とても女らしくて、お

9) Jacques Noiray, notice à son édition de *Paris*, Paris, Gallimard, coll. « folio », 2002, p. 664 ; Brigitte Emile-Zola et Alain Pagès, préface de *Lettres à Jeanne Rozerot 1892-1902*, édition établie, présentée et annotée par Brigitte Emile-Zola et Alain Pagès, Paris, Gallimard, p. 18 ; Michelle Perrot, « De Lourdes à Vérité : les femmes du troisième Zola », in *Zola, op. cit.*, pp. 158-162. [邦訳：ミシェル・ペロー「『ルルド』から『真実』まで—第三のゾラにおける女性たち—」、『ゾラの可能性 表象・科学・身体』所収、小倉孝誠・宮下志朗編、藤原書店、2005, pp. 135-152.]

10) Emile Zola, *Paris*, dans *Œuvres complètes*, tome VII, p. 1275.

金をかけなくてもお洒落ができたし、楽しく過ごす術を心得ていて、いつでも明るく嬉しそうにしていた。[…] メール・グラン (Mère-Grand) のように、彼女もほとんど無意識のうちに穏やかな無神論に至っていた¹¹⁾。

メール・グランは、ギヨームの亡くなった内縁の妻マルグリットの母親で、プロテスタントの家庭で育ち、夫の感化を受けて信仰を捨てた女性である。リセ・フェヌロンで教育を受け、メール・グランと過ごす日々の中で信仰の実践を断るようになったマリーは、第三共和政下のフランスで進められた国民教育の世俗化や女子中等教育を確立したカミーユ・セー法の成立 (1880) などの影響を受けている。さらに、ゾラは「女らしさ」と結びつけたこの人物を「間違いなく彼女は優しさと献身のすべてを兼ね備えて存在していた。伴侶としての女性だった¹²⁾」と書くのである。それは教会から娘たちを引き離そうとした当時の共和政主導の教育改革が、女性の自立よりも「夫の良き助言者」や「家庭の良き母親」を育てることに重きをおき、「母性」を称揚する当時の社会において、「優しさ」や「献身」が女性の本性として語られていた事情¹³⁾を浮かび上がらせている。モダンな教育を受け、ギヨームとマルグリットの間に生まれた3人の息子を「子どもたち」と呼ぶ若い母親としての振る舞いを身につけたマリーは¹⁴⁾、刺繍を好み、朗らかに家事をこなして、「家庭の安寧に必要な役割¹⁵⁾」を引き受けていた当時の女性たちの状況を映し出す。ここに至って、子どもたちの「徳育」と「知育」に取り組むことができるマリーと、1902年の家族写真 [図版1・2] でゾラがジャンヌを通

11) *Ibid.*, p. 1273.

12) *Ibid.*, p. 1275.

13) こうした事情については、以下を参照。Elisabeth Badinter, *L'Amour en plus — Histoire de l'amour maternel, XVII^e-XX^e siècle*, *op. cit.*, pp. 316-325; Françoise Mayeur, « L'éducation des filles : le modèle laïque » in *Histoire des femmes en occident*, sous la direction de Georges Duby et Michelle Perrot, Paris, Plon, 1991, tome IV, pp. 231-246. [邦訳：フランソワーズ・マイユール「娘たちの教育—非宗教的モデル—」、ジョルジュ・デュビエ、ミシェル・ペロー監修『女の歴史IV 19世紀1』所収、杉村和子・志賀亮一監訳、藤原書店、1996, pp. 375-401.]

14) Emile Zola, *Paris*, *op. cit.*, p. 1278.

15) 工藤庸子、前掲書、p. 153.

して写し出そうとした「良き母」の肖像が重なる。

興味深いのは、ゾラがマリーを自転車に乗る女性としても創造していることである。作家は草稿段階からサイクリングの場면을検討しており¹⁶⁾、実際に決定稿の「第4の書」第3章で、サン＝ジェルマンの森を自転車で走るピエールとマリーを描いている。信仰が揺らぎ、苦しみ続けた若い神父は、ついに僧衣を脱ぎ捨てて自転車に乗り、自然と太陽の下へ立ち戻る。彼と連れ立って森でサイクリングを楽しむマリーはブルーマーの信奉者で、自転車が女性を解放すると考える理由を次のように語る。

ブルーマーで足が自由になれば、男女が一緒に出かけられて平等になるし、妻子は夫の行く所へどこでも行くことができ、私たちのように仲間ふたりで野原や森を走っても、誰も驚きません。これこそ、自転車によって獲得できたものですね。大自然の中で空気を存分に吸って、光を浴び、私たちの母なる大地へと帰るのです¹⁷⁾。

マリーが「家庭」という単位を念頭に置いたうえで、女性と自転車の関係や、ブルーマーを着用する意味を述べているのに注意したい。妻としての視点から自転車に乗る意義を説明する点で、この人物は当時の風刺画で流布した女性たちのイメージとは一線を画するのである。ゾラの小説世界で、太陽と教会が生と死の関係にあることを思い出すならば、マリーの役割とは、ピエールを死から生の世界へ引き戻すことに他ならない。ピエールを先導して自転車を漕ぐマリーが、徐々に速度を落として横に並び、仲良く風を切って進む様子は、主人公を虚無から引き出し、やがて結婚する「伴侶としての女性」という小説内での彼女の役割を象徴的に表している。陽光を浴び、自然の懷に抱かれたピエールとマリーを「揃って滑翔するつがいの鳥¹⁸⁾」に例えるゾラは、上の引用における「母なる大地へ帰

16) Plan de *Paris*, Bibliothèque Méjanes d'Aix-en-Provence, Ms. 1472, f° 376.

17) Emile Zola, *Paris*, *op. cit.*, p. 1448.

18) *Ibid.*, p. 1450.

る」というマリーの言葉を通じて、彼らを「豊饒」と結びつける¹⁹⁾。サイクリングの場面からは、「自転車」と「女性」を通して新しい家庭のイメージを描き出そうとしたゾラの意味が見て取れるのである。

自転車を通して、マリーは自らの教育観も詳らかにする。

もし、いつか私に女の子が生まれたら、10歳になり次第、自転車に乗せて、生きる術を教えます。[…]女の子を小さなうちに自転車に乗せて、道路に出してあげるの。そうすれば、その子は目を開き、小石にぶつかりそうになったら避け、曲がり角が見えたら、適当な時に正しい方向へハンドルを切らなくてはならないでしょう。[…]小石を避け、適当な時にハンドルを切ることができる女性は、社会生活や恋愛でも困難を乗り越えられ、柔軟に、真っ当でしっかりした判断力をもって、最善の決断を下せると思うのです²⁰⁾。

1860年代から、ゾラがブルジョワ階級の女子教育にきわめて批判的な作家であったことを思い出そう——鑄型にはめられた寄宿学校の少女たちは、実生活で求められる現実的な知恵を身につける機会もなく、一様にマネキン人形のような女性に成長する。家庭教師をつけて自宅で教育を受けた場合も、純粋さを求める両親によって、無知なまま密室で育ち、貞淑が何たるかも理解せずに結婚する。これらの女性たちは、結局、社会に不健全な気風や退廃をもたらす²¹⁾——こうした論をさまざまな形で展開してきたゾラは、20世紀を目前とする時期に、世の中

19) この点は、女性を出産と家庭に結びつける当時のブルジョワ的なイデオロギーの枠内にゾラが留まったことを浮き彫りにしている。『パリ』を視野に入れて、こうした問題を取り上げた論考は、例えば次のとおり—— Chantal Jennings, « Zola féministe? II » in *Les Cahiers naturalistes*, n° 45, 1973, pp. 1-22 ; 坂本浩也「自転車をめぐるフィクション—19世紀末フランスにおける速度の詩学と性差のイデオロギー—」、『ヨーロッパ研究』、第3号、東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター、2004, pp. 81-98.

20) Emile Zola, *Paris, op. cit.*, p. 1447.

21) Cf. Emile Zola, « L'Adultère dans la bourgeoisie », *Le Figaro*, 28 février 1881, dans *Œuvres complètes*, tome XIV, pp. 531-537 ; « Femmes du monde », *Le Figaro*, 27 juin 1881, *ibid.*, pp. 681-685.

で「子どもを生みながらいない女性」の代名詞となっていた自転車に乗る女性を母の視点を持った人物像へと変化させた。マリーの創造を通じて、新しい女子教育への視界を開こうとしたのである。

ゾラはこの「女子を自転車に乗せる」という『バリ』で示した論を1900年に受けたアンケートの中でも繰り返しており²²⁾、自転車に乗った10代のドゥニーズを同年カメラに収めている〔図版11〕。実生活において、この作家は娘を積極的に自転車に乗せていたのである。ドゥニーズ・ルブロン＝ゾラは、カメラの前で大きな自転車に乗り、ポーズをとるのは苦勞に満ちた体験であったと回想し、父親に怒られた唯一の記憶が自転車と結びついていると明かす。

父は、ジャックに支えられて自転車に乗る私を撮ろうとしていた。私は自転車から落ちるのではないかと思うと死ぬほど怖くなり、泣き出してしまった。父はいらいらしながら写真を撮った²³⁾。

1896年にスカート姿で自転車に乗るジャンヌを撮ったように、ゾラにとっては、自転車に乗る10代のドゥニーズもカメラに収めるべき一枚であったに相違ない。この写真には、ドゥニーズが「真っ当でしっかりとした判断力」を持ち、社会生活のさまざまな場面において、現実的な知恵で「最善の決断を下せる」柔軟な女性に成長してほしいと願ったゾラの父親としての思いが表れている。自転車に乗る女性の表象を通じて、作家の小説世界と私的世界は確かに重なる部分を見せるのである。

ジャンヌ母子と自転車をめぐる写真を検討すると、晩年のゾラがファインダーの先に見出し、写し留めようとしたのは、家族を軸とする幸福な生の輝きであったことがわかる。2枚の写真が示すように〔図版9・12〕、サイクリングをするゾラ一家は全員が同じ速度で自転車を走らせ、横一列に並び、サン＝ジェルマンの

22) « La Femme dans les sports modernes (Enquête) », *op. cit.*, p. 22.

23) Denise Le Blond-Zola, *Emile Zola raconté par sa fille*, Paris, Grasset, 2000, pp. 182-183.

森を疾駆したピエールとマリーのように「揃って滑翔する鳥」となって、カメラに自分たちの姿を収めたのだった。

結論

以上のように、主に自転車に乗る女性の表象を通して、ゾラの小説と写真の問題を概観した。

1890年代半ばから、ジャンヌと子どもたちは夏をヴェルヌイユで過ごすようになり、ゾラがメダンの自宅と彼らの家を自転車で毎日往復したのは良く知られる²⁴⁾。当初から、離れて暮らす彼らを結びつけるのに自転車は欠かせないものだったのである。家族全員でサイクリングを楽しむようになると、ジャンヌ母子はゾラと連れ立って、『パリ』のマリーが述べたように「大自然の中で空気を存分に吸い」、「光を浴び」、自転車によって獲得したものを享受した。作家にとって、それは確かな幸福の風景であった。

ゾラにおける自転車に乗る女性の表象は、同時代に流布した風刺的なイメージとはかなり異なるものであったが、その相違は「人口減少」などを発表する当時の作家の中で、「家族」が無視できないものとして常に意識されていた問題に帰着する。この問題は晩年のゾラの文学世界だけではなく、カメラで為された私的世界の記録においても最も重要な主題であり続けた²⁵⁾。人生の記録を次々とカメラに収めた晩年のゾラの様子からは、自分を取り巻く世界の記録を残したいという本能が透けて見える。写真を通して見えてくるゾラの欲求と文学創造との関係については、今後もさまざまな面から検討を重ねる必要がある。

24) *Ibid.*, p. 183.

25) この問題については、別稿も参照されたい。高橋愛「ゾラ『パリ』と写真をめぐる視覚体験—窓辺の記憶からたどる母子の表象—」、*Gallia*, 第53号、大阪大学フランス語フランス文学会、2014, pp. 21-30.

図版 1

図版 2

ゾラにおける自転車に乗る女 高橋 愛

図版 3

図版 4

488(101)

図版 5

図版 6

ゾラにおける自転車に乗る女 高橋 愛

図版 7

図版 8

486(103)

図版 9

図版 10

485(104)

ゾラにおける自転車に乗る女 高橋 愛

図版 11

図版 12

484(105)